☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ！
☆プロレタリア世界革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！
共産主義者同盟

2月6日
週刊
第211号
編集発行人　鹿島　昴
一部　20円
購読料　20回500円（〒共）

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2―7―6滝沢ビル内電話代表03（261）2961　振替　東京　26110
大阪支局大阪市都島区都島南通り3―7―16
電話06（921）1457
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町128―29（075）（701）0025
名古屋支局052（732）3553

11日／小西三曹闘争
（板橋第二徳丸公園、午後一時）
〃　紀元節粉砕・卒闘勝利　安保粉砕・沖縄闘争勝利　全都高校生統一行動
（明治公園午後一時）
17日／「小西を！」関西行動委結成大会
（大阪市立労働会館）

全軍労・成田・小西叛軍・反レ・パ

恒常的武装闘争の質を更に全階級戦線へ

全軍労支援第三波に万余

反戦・全共闘、赤ヘル先頭に四月闘争へ

2月4日、午後六時より、全共闘・反戦主催の沖縄全軍労スト支援総決起集会が、明治公園にて、一万四千名を結集して盛大にかちとられた。

沖縄全軍労に対する支援闘争はこれまで首都段階では全共闘によって二波にわたって緊急闘争が取り組まれただけであったが、この日の闘いによって、プロ独を志向する反帝統一戦線がようやく総力を挙げた支援体制と四―六月にむけた戦闘体制＝安保―沖縄、成田、反レパを主軸とした七〇年前半の恒常的武装闘争―への意志統一を総体として確認する段階に到達したのであった。

しかし、問題は、七〇年代前半の闘いの基本性格と構造を創出するものとして沖縄基地労働者と連帯する本土労働者・学生の闘いの内実が問われているが故に、沖縄の帝国主義的再編をめぐる戦略論争、昨秋安保闘争に煮つまった「軍事」をめぐる運動・組織論の再構成が、まさに一体となって革命党への諸組織の革命の問題をつきつけているが故に、「支援闘争への大衆的決起」をメルクマールに闘争の高揚を推し計ることの出来ない現局面に対して、諸党派がいかなる政治、組織内容をもって応えるかに当面の闘いの鍵が存在するのである。

そのような観点からするならばこの集会における各大学全共闘を代表した諸党派の発言には問題の所在すらつかめず、政治技術的対応によって、カンパニア闘争をそれのみに押し止めることによってのり切るという、まさに、「大言壮語」とはうらはらに、計画としての戦術の不在を自己暴露する傾向が未だ払拭されていないことを明らかにしたのであった。

その典型は、中核派である。彼らは、昨秋闘争の「勝利」を語り、「七〇年代の内乱」を沖縄奪還論とともに強調するのだけれども一向に、それを可能ならしめる根拠が示されないという危機を露呈しているのである。とりわけ、それは、沖縄奪還論が具体性をもってその破綻を示しているのにもかかわらず、それを認めず技術的手直しによってますます矛盾を深めていること（「前進」468号では「これからだ」ということによって奪還論の過去を無総括のまま払い去ろうとしている）に示されているし、それは、運動論においても、とりわけ反戦派労働者への指導に向けた闘いの中で沖縄闘争は経済主義的体質を露呈せざるをえないものとして危機が具体性を帯びていることを予見させるものである。

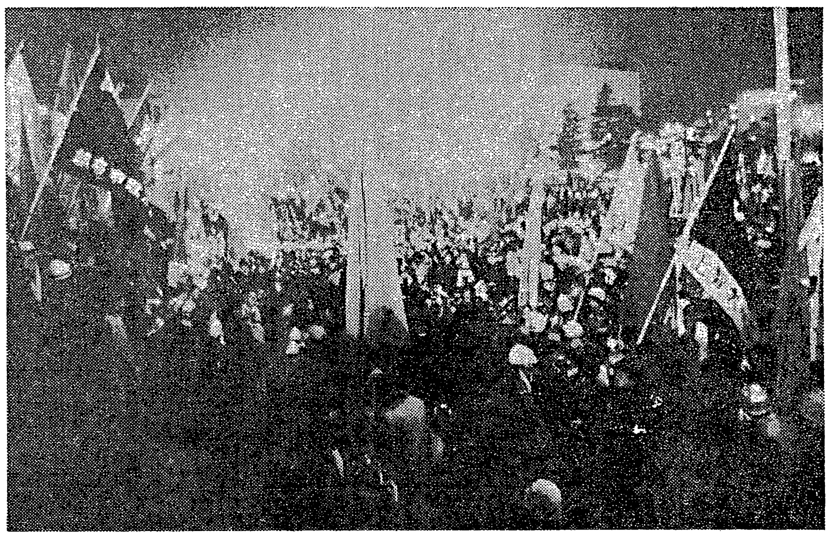
一方、構改派は、当初の返還論からのり移ってわれわれの主張に屈服し、自らもはや構改派ではないなどと言い張っており、そのフロントにおいては「侵略前線基地化阻止」のスローガンを前面に掲げることによって、共労党は、ヘルメットの色を緑から赤に変えることによってなんとか認めてもらおうとしているのだが、しかし、それは、とりわけ、「軍事」問題の前進に端的に表われているようにわれわれのそれとは似て非なるものであることをやめてはいないのである。

ML派は、ML派を除く、日本の中共派の大同団結とそこからのML派のパージによって、そして中共派が「ソ修打倒」を前面に押し出すことによってプロレタリア国際主義における「労働者国家」と、「組織された暴力」の困難性を排外主義に転化させ、しかもワルシャワ米中会談によってますます自らの展望の喪失を自己暴露する中にあって、「昨秋闘争の勝利」が完全に空語化する中で、必然的に党内闘争に直面せざるをえない局面を迎えているのである。

赤ヘル部隊は、過渡期世界論―前段階決戦戦略の一層の豊富化とそれを「内戦―世界革命戦争」として勝利的に推進しうる正規軍―地区軍団―反帝戦線の組織構造の創出へと二―三月闘争の獲得目標を設定し、沖縄―成田―反レ・パ闘争こそ、まさに、かかる運動組織構造の創出をもっての恒常的武装闘争の一時代を切り拓くものとしても諸党派の混迷を尻目に着実に前進を遂げていることを唯一示したのであった。

一月闘争から、この2・4闘争を通して、権力、日共―社民・革マルの思惑は完全に払拭され、とりわけ、赤ヘル部隊の巨大な前進と大衆的高揚の持続は、七〇年闘争の展望を確実に保証しつつあるのである。

集会の後、国労会館前までの長蛇の、かつ戦闘的なデモが最後まで貫徹された。



全軍労支援で明治公園を埋めつくす反戦・全共闘（2月4日）

一月二五日の「第二・第三の小西を」東京行動委員会主催の「自衛隊解体」第一波全国統一闘争が防衛庁デモとして闘われたのに引続き、第二波闘争が二月十一日に闘われる。

階級闘争の前進と帝国主義軍隊解体

わが同盟は六八年沖縄闘争を契機に日米帝国主義打倒、日米帝国主義軍隊解体の戦略スローガンをいちはやくうち出した。安保個別実体に対する自然発生的反戦闘争に拝跪する諸党派を批判しつつ、諸々の反戦闘争が帝国主義打倒の意識性を獲得する環として自衛隊の戦略的解体をかかげ、それを中央権力闘争としての防衛庁闘争を提起し、六八年一〇・二一に赤ヘル部隊単独で貫徹したのである。

この国際反戦デーを期して闘われた防衛庁攻撃闘争を通じて、従来の反戦闘争は帝国主義軍隊解体の戦略的方向性を附与され、その政治的質を一歩飛躍させられたのである。それは、今日、ベ平連レベルにいたる数多くの大衆団体が「自衛隊解体」を口にしている事実に表明されている。

六八年の防衛庁闘争から一年余の階級闘争の経過は六九年安保決戦の敗北にもかかわらず、闘う主体はさらに前進した。六八年一一・七にはじまる敵権力の反撃による実践の苦闘の中から生み出され、わが同盟九回大会を契機とする軍事を組織する党建設の中で獲得された現代革命論の模索の中で帝国主義軍隊の解体が革命論として位置づけられ、豊富化されたことである。

わが同盟の前段階決戦戦略の画期性

われわれが九回大会を通じて獲得した現代革命戦略の骨格は世界革命戦争・内戦を通じての前段階決戦である。

現代過渡期世界の構造は、ロシア革命以降の革命運動の継承が中国ベトナム北部、キューバを根拠地化しつつ後進国における大陸革命戦争として持続的に展開されているおり、そのことが帝国主義列強をして、反革命同盟を結成せしめている要因をなしている。米帝の後退に伴う帝国主義の世界的再編においてもこの反革命同盟の再編として進行せざるをえない。このような条件のもとでの帝国主義の侵略はその国内統治において、諸階級を排外主義に強固に収約することを困難ならしめる。一国の帝国主義者がその世界戦略の展開によって国内諸階級を牽引する条件が失われつつあることが、世界革命をかかげる革命的左翼の登場とともにここ数年の世界的な反帝闘争の高揚をもたらしているのである。世界プロレタリア独裁の樹立にむけて、帝国主義国内部における内戦をわれわれが提起するのは、大陸革命戦争の存在と、ここ二・三年の帝国主義諸国における軍事闘争の復権をふまえた現代過渡期世界の分析からする論理的帰結であった。

前段階決戦は、レーニンの帝国主義戦争を内乱へ対置するものであり、レーニン革命論が革命の客観的条件を帝国主義戦争にともなうブルジョア支配の動揺、諸階層の国民的収約のマヒに求め、権力問題の基軸である全人民武装の問題も、総力戦としての帝国主義戦争において、徴兵制を通じて一たんはブルジョアジーによって武装され、収約されたプロレタリアート農民（＝兵士）を、戦争の継続によるブルジョア収約の混乱・のブルジョア支配からの離脱に対して一挙にこれを獲得するものであった。

ロシア革命以後の現代過渡期世界における階級闘争の質は、一たび獲得された世界革命の根拠地（変質以前のロシア）建設を頂点とする世界プロレタリアートの成長による革命の現実性は、帝国主義の内と外に強固で積極的な反帝闘争を引起し、帝国主義の政治展開は、国内プロレタリアートとの政治決着なしには、不均等発展による再編としての帝国主義戦争に行きつかない。両大戦間においては、革命運動が権力をうかがう力にまで成長していたドイツ・イタリーにおいては帝国主義の反革命はファシズムによる革命的プロレタリアートの殲滅から戦争への道をたどり、日本においては、比較的弱体であった革命勢力を二八年三・一五弾圧を頂点に二〇年代末に壊滅して、三一年の中国北部侵略（満州傀儡政権樹立）から中国戦争を通じて国内軍部独裁体制（上からのファシズム）を築いたのである。いずれもロシア革命を成功させた世界プロレタリアートに対するブルジョアジーの総括であった。すでに第二次大戦の以前において、前段の階級決戦が不可避となっていたのであり、スターリニストは、レーニン革命戦略を教条化することによってこれに全く対応しえず世界プロレタリアートを革命的な敗北に導いたのであった。

前段階決戦戦略―恒常的武装闘争の下で自衛隊解体闘争の推進を！

三〇年代の帝国主義国階級闘争の惨担たる敗北にもかかわらず、第二次大戦と戦後の階級闘争は、中国革命の勝利、ベトナム抗仏闘争の勝利とひきつづく南部解放闘争、キューバ革命の勝利と民族解放・プロ独樹立の後進国階級闘争の領域において巨大な前進が行なわれた。両大戦間の西欧帝国主義再建の物質的根拠であり、第二次大戦後の世界帝国主義反革命の砦として君臨した米帝も、ヨーロッパ、日本の保持におわれ、後進国階級闘争においては常に後手にまわらざるをえなかったのである。

こうして両大戦間に比較して、革命に有利な陣型が存在している。しかも、それは、革命勢力の強化の結果として帝国主義の反革命を引出すことによって前段階決戦をより必然的なものとしているのである。

問われているのは、大陸革命戦争に呼応する帝国主義国内における内戦の組織化である。われわれはこれを軍事を組織しうる党の建設・党直轄の軍団・赤軍の建設として組織方針化したのである。

前段階決戦の遂行は、帝国主義の暴力装置に対抗し、内戦を闘う

帝国主義軍隊解体は、帝国主義の侵略戦争の今日の展開とその矛盾の中にその根拠をもっている。それを具体的に明示しているのが米帝のベトナム侵略、反革命闘争である。

米帝のベトナム出兵以来、数年を経過した現在、それは、米帝の軍事戦略を根底から変質させている。五〇年代、体制間戦争を想定し、中、ソ封じ込め、大陸侵略戦争を主軸に組織された米帝は、すでに朝鮮侵略において、対ソ戦略に対する弱点を示していたが、ベトナム戦争において、わずか九州程度の面積と人口のベトナム南部において、勝利出来ないことを通じて全面的に暴露したのである。

米帝の核を軸とした恐怖の均衡による世界支配は人民戦争につまずかされ、その軍事戦略を対人民戦争＝反革命戦争に変更を余儀なくされている。その政治的意義はきわめて大きい。いまや米帝は、ベトナムへ引き出されているのであり、それを通じて世界革命戦争の陣型である世界単一の戦場とする帝国主義ブルジョアジーとプロレタリアートの全世界的闘いの契機を支えているのである。この戦争の階級的性格は日を追って全世界人民の前になかんづく米国人民の中に明らかになりつつある。米国史上かつてない大規模な反戦闘争が発生し、徴兵拒否が続発している帝国主義の根拠地としての米帝の軍隊がその侵略・反革命を通じて解体の危機に陥りつつあることは、より弱体な他の帝国主義国も共通する危機を内包していることを示すものである。

小西三曹の闘いの革命論的位置づけ

小西三曹の治安訓練拒否闘争は、世界的な帝国主義軍隊解体をめぐる彼我の攻防の中で位置づけられる画期的事件である。

世界帝国主義の再編の中で勃興する帝国主義としての日帝が、七〇年代アジア制覇を目指しつつ、その侵略、反革命の諸準備を急激に進行させ、その突破口を七二年沖縄派兵において切開くことが具体化した一点で、この事件が起きた意味は大きい。それは第一に、日帝の侵略・反革命が、日々急速に進行していることがこの革命的闘争を引起した要因であるとともに、いまだ、侵略（出兵）の具体化が行われていない現在の時点で、兵士の反乱が始まったことである。それは日帝の侵略戦争が容易に行ないえないことに規定されるものであり、侵略戦争の開始は、同時に内戦の開始を規定させるものである。日本帝国主義軍隊の政治的脆弱性はこの外的条件のもとで侵略戦争の以前に内乱鎮圧に出動させられる可能性のあることである。治安出動はブルジョアジーにとって両刃の剣であり、それはストレートに最強の暴力装置を失う可能性もあるのである。小西三曹の事件が治安訓練を契機に起ったことは、自衛隊の政治的脆弱性を明示している。

第二に小西三曹を生み出した主体的条件が、一〇・八以降のプロレタリア国際主義と組織された暴力による反帝闘争の成果であることである。少年自衛隊入隊という自衛隊の中軸養成コースをたどった彼が、革命的兵士へ転化する契機が、一〇・八―東大闘争の全国的波及の中で、全共闘に参加したことによるのは、決して彼が例外存在ではなく、その社会的条件が存在し、しかも我々が組織しうるの反帝統一戦線の内に第二、第三の小西が存在していることを示すものである。

われわれが帝国主義軍隊の解体にむけて、自衛隊の内なる解体、革命的兵士の獲得に全力を注がねばならないことはいうまでもない。しかし、ここで再度はっきりと明らかにしなければならないことは帝国主義軍隊の解体はあくまで、世界革命戦争、内戦による前段階決戦の革命戦略にもとづく、武装闘争の実践、その要としてのわが赤軍の建設と軍事闘争の展開にあるのであって、一般的な自衛隊に対する宣伝、煽動は制動である。小西君を生み出したのが、まさしく、防衛庁闘争を頂点とする自衛隊解体闘争であり、わが同盟が赤軍建設に着手する過程の反映であったことは、彼のビラが如実に物語っている。

赤軍を組織し更に自衛隊解体闘争を

自衛隊は明確に反革命軍隊であり、しかも志願制による特殊部隊である。ロシア革命の事例は先述したように適用出来ない。自衛隊を解体する決め手となるのはわが赤軍を中軸とする革命の軍隊の主体的力量に決定的に依拠しているのである。そしてその前段に避けて通ることの出来ない機動隊粉砕の恒常的武装闘争が横たわっているのである。

わが同盟とわが赤軍の領導する反帝統一戦線の恒常的武装闘争の展開が自衛隊の反革命的出動を引出し、これを解体する直接的契機を与えるのである。この恒常的武装闘争を維持拡大して、はじめて諸々の自衛隊[illegible]の宣伝、煽動は有効性をもちうるのである。革命的兵士の獲得とは、ゆきつくところ、赤軍への結集であり、その武器を支配階級に向けることである。

小西事件は、この観点より位置づけられて革命的展望を持つのである。われわれはその意味で「第二、第三の小西を！東京行動委員会」をはじめ、諸団体の自衛隊解体の宣伝煽動を高く評価するものである。日、米帝国主義の軍事戦略体系に対する恒常的武装闘争と大衆的宣伝、暴露闘争の重層的攻撃によって全国・世界の軍事拠点を包囲し、政治的、軍事的解体を計ることが、帝国主義軍隊を解体する途である。

このような闘いの中で、小西裁判闘争は新しい質を持ちつつある。一月二十五日新潟で行われた弁護団会議で、日共、社会党の弁護団は、護憲論の立場から人権問題として、自衛隊違憲判決を引き出す第二の恵庭事件として取扱おうとしたのである。しかし、小西問題は断じて、人権、違憲問題に矮少化されてはならない。小西君は、正しくも「帝国主義打倒、全人民の武装、赤軍への結集、武装反乱、革命政府の樹立」を訴えたのである。われわれは、この小西君の革命的行動とその思想性を裁判に名をかりていささかも後退させてはならない。この裁判を自衛隊解体の政治宣伝の場と化し、これを自衛隊に対する政治工作の一環としてビラマキ等の大衆的宣伝、煽動を強化する必要がある。すでに新潟におけるビラマキ、デモで一八名を越す行動委の同志が、恐怖した権力の気ちがいじみた弾圧で逮捕されている。行動委運動は仙台、大阪、徳島、浜松、鳥取に拡大している。この大衆闘争の拡大と、一月二五日の日共系弁護団との訣別は、大衆闘争が、民主主義擁護を契機とするのではなく、自衛隊解体、軍事反乱の呼びかけというストレートな反帝闘争の思想性をもって組織されているからである。われわれはここに七〇年代内戦の前哨としての恒常的武装闘争の大衆的基盤の存在とその組織的拡大の展望を見出すことが出来る。

「小西を！行動委」第二波に結集せよ

2月11日　一時、板橋第二徳丸公園

本紙前号既報の通り、一月二五日、「第二・第三の小西を！」東京行動委主催第一波闘争が赤ヘル部隊に領導されて闘い抜かれた。

この闘いの意義を確認し、「自衛隊解体」へ向けて自衛隊内部における組織化と呼応、結合する闘いを一層推し進めるものとして、二月十一日に第二波闘争が設定された。

既に第一波闘争が鮮明に示したように、小西三曹闘争を決して第二の恵庭裁判＝自衛隊違憲判決を引き出す裁判闘争に押し止めてはならず、何よりも、大衆闘争として諸階級・諸階層に小西三曹の闘いの意義を押し拡め、同質の闘いを通しての階級的連帯をかちとるものとして、この闘いを推進していかなければならない。

しかし、問題は自衛隊を解体し赤軍を組織する戦略的展望を要求される闘いであるが故に、諸党派の目的意識的関わり合いが問われ、わが同盟を除く諸党派においては、この闘いの方向性すら提起しえないことによって大きく取り組みが遅れている現実によって、わが赤ヘル部隊の圧倒的結集が第二波闘争においても問われていることを確認しなければならない。

反戦・全共闘は東京行動委に結集し、第二波闘争に決起せよ！

なお、関西の地においても行動委員会が結成されつつある。二月十日には、京都行動委員会が京都民生会館において結成大会を開催する。二月十七日には関西行動委員会が大阪市立労働会館（森の宮）において結成される。

全関西の労働者・学生・市民はこの結成大会に結集せよ！各地で「小西を！行動委員会」を結成せよ！

関西でも第三波に

反帝統一戦線が最大結集

【大阪支局】昨年の沖縄2・4ゼネストの挫折は今、全軍労基地労働者の二波にわたる基地撤去をめざしたストライキとこれに触発された全島ゼネストへの準備へと巨大な転換を開始し、現地沖縄の闘いの様相を一変させて七〇年の2・4を迎える中で、首都に呼応した第三波闘争が、関西の地において、反戦、全共闘、ベ平連共催の集会―デモとしてかちとられたことを報告する。

午後六時から大手前公園教育塔前は、三千の部隊によって戦闘的雰囲気みなぎる中で占められた。

この「全軍労解雇粉砕、沖縄ゼネスト貫徹、春闘勝利、安保粉砕2・4関西労学統一行動」の特徴は、何よりも、諸党派の政治主張のわれわれのそれへの接近と「奪還・解放」両派の凋落が第一に指摘されるものであった。

第二に、反帝統一戦線は内部に論争を当然のことながら抱えながらも、圧倒的な結集力を示しつつ革マル派の脱落（百名内外の集会）、社会党系の独自集会（約六〇〇名）の設定によって、これまでの「全大阪反戦」として「統一」されていたこの三つの潮流が三分解を遂げたことである。これは、関西の地において、今後の基本構造となるものであり、ますます全国化していくものとなるであろう。

わが赤ヘル部隊からは、電通労働者、同志社大全闘委が発言し、沖縄闘争は全軍労を主軸に基地撤去闘争として闘い抜かれねばならないこと、そしてこれが、諸階級・層を統合したソビエト運動へと高められるためには、とりわけ侵略前線基地化＝本土一体化との永続的な闘いを武装を軸に組織化すること、そのためには、本土復帰・返還論とのイデオロギー闘争が不可欠であり、かつ、本土における恒常的武装闘争の構造を創出することこそ基地労働者との連帯の具体的な内容であり、現地の闘いをも領導するものであることが明らかにされた。

集会の後、本町四丁目―御堂筋―難波のコースで戦闘的なデモを貫徹した。

同盟千葉県委員会再建アピール

恒常的武装闘争を推し進め内戦の七〇年代を切り拓け

共産主義者同盟千葉県委員会

全国の革命的同志諸君！昨秋安保決戦の鉄火の試練に耐え、帝国主義の侵略、反革命同盟再編攻撃に抗して、日夜、偉大なる革命闘争を推進し、恒常的武装闘争を英雄的に展開している革命的戦士諸君！そしてまた帝国主義のなしくずしファシズム攻撃を軸とした、帝国主義的再編攻撃、レパ攻撃に真向から対決し、権力闘争に決起せんとしている、全国の労働者、学生、農民、市民、高校生の諸君！

我が共産主義者同盟千葉県委員会は、昨秋安保決戦を諸君と共に闘い抜く中から、内戦の70年代を領導し抜く、軍事を組織しうる、党主体の革命を推し進め、更には世界プロ独を切り開く革命軍の建設を軸に、全人民の武装闘争を領導するところの戦略部隊の構築を持って、同盟県委員会の革命的再建を実現した事を同盟内外に明らかにする。

昨年四・二八闘争が提起した、「軍事」を巡る、党内、分派、党派闘争の嵐は、同盟県委員会解体の危機にまでおいこみ、県委員会内部において、「赤軍派」の軍事技術主義の跳りょうを許す結果となった。しかしながら、赤軍派の戦線離脱を乗りこえ、昨秋安保決戦をその先頭において闘い抜いて来た、「市川地区学評」ならびに、「習志野反戦」に結集する、革命的戦士は、自らを軍事によって強固に武装すると共に、自らの自立主義的限界を克服し、まさに、七〇年代を永続的に闘い抜く「内戦的主体」にまで飛躍せしめ、同盟県委員会の革命的再建の主軸として、登場した。

激動の七〇年代は、革命兵士小西三曹の、帝国主義軍隊解体の闘いをはじめとして、沖縄全軍労、労働者の英雄的闘い、三里塚空港建設阻止を、武装自衛によって、強固におし進めている革命的な三里塚農民の闘い、更には昨秋一〇・二一闘争において、革命的大阪中電労働者が、切り開いた武装権力闘争の嵐は、今や全国の職場、地域、学園における、一大反レパ攻勢として爆発している。

我々は、この激動の階級攻防戦を、党、軍、全人民の武装を軸として、恒常的武装闘争を意識的、組織的、計画的に切り開かなければならない。

現在千葉県下においては、我同盟県委員会と、強固に連帯した、共青同、社学同を軸に、「習志野自衛隊解体闘争」「日医大反レパ闘争」「三里塚決戦」へ向けて着々組織化が進行している。この三つの闘いを軸に恒常的武装闘争を闘い抜き、我同盟の革命戦略によって武装した地区軍団に領導された戦略部隊、「反帝戦線」の飛躍的強化をかちとり、四～六月の激動へ向けて、破竹の進撃を開始しつつある。

県委員会再建後、旧赤ヘル部隊は急速な勢いで我同盟、共青同、社学同の下に続々と結集して来ている。我々は、この党、軍、ソヴイエトを軸として、急進市民主義者＝中核および、改良主義の革マル派との党派闘争を勝利的に展開しつつある。

革命的労働者、学生、農民、高校生、市民諸君！我同盟、共青同、社学同の下に結集し、内戦の七十年代階級闘争を闘い抜こう。

三里塚現地、決戦へ進撃

全国で闘争体制を確立せよ

警察権力は、先月末七、八十名の私服刑事を一日おきに三里塚現地に送りこみ、団結小屋等への強制立入捜査を間近かに控えた偵察を行っている。反対同盟はこの攻撃に対して、団結小屋のバリケードをますます鉄壁にするため[illegible]ともに、五日、[illegible]の結集行動訓練を敢行した。警報が発せられてから総結集までに要する時間を現在の四分の一に短縮することをはじめとして、戦闘態勢は一層力強く整えられつつある。

三里塚をめぐる闘いは、67年10・10（10・8羽田闘争の翌々日、現地投入の機動隊と現地反対同盟の肉弾衝突）を決定的契機として以降、反帝統一戦線の拡大と再編の歩みとともに進んできた。十・十一月安保闘争を受けた昨秋～暮の闘いでは、資材搬入道路建設のために現地へ運びこまれたトラクター二十台余りがいつのまにか破壊され、また、反対同盟員の大量逮捕に対しては、青行隊を先頭とした反対同盟の戦闘部隊によって成田警察署が数時間にわたり実力占拠された。十・十一月闘争がつくり出した恒常的武装闘争の時代はここ三里塚においても確められたのである。

三里塚反対同盟は、あきらかに日本農民運動史、基地闘争史上、比類ない力と団結をつくりだしている。たとえば、青行隊機関誌「青年戦線」は、次のように述べる。

「空港反対闘争の初心―それは限りない意見と行動と交流によるおびただしい大衆性であり、それを政治・思想において十分領導するような農民の闘う意志を代表する指導体制と、闘う農民のすべてに自立、自尊の精神がある。そして、土地は百姓してゆくものの団結した力によって権力の手から守るとともに、敵が土地をかっさらうのを革命として百姓を抑圧してくるのだから、土地は百姓の大切な武器であり、だからそれは積極的な攻撃の性格をもあわせそなえていたのだ。

土地が武器であるとき、百姓と土地との間に真に鮮血がかよいあい、土地に武器としての命がになわれるとき、「強制収用」のごときは対決してなお余裕あるを明らかにするであろう」

「我々は強制収用との闘いを諸戦として本来の意味で国家権力と全面的に対決する。新たな"10・10闘争"が始まる。

我々は遂に被害者として権力の本質を明らかにするまでその闘争の生命を閉じるか、また、国家に対する加害者として人民の暴力と百姓の制裁でたたきのめすか。いま、苛酷な階役にも見えるが三里塚、芝山の農民は必ず勝つ」

ここにあるのは、旧来の基地農民における「農地死守」の論理の延長ではない。「土地を武器として闘う」思想は、毛沢東の「土地を時間に代えて闘う」思想をほうふつさせないであろうか。そしてまさに、世界革命戦争と全人民の武装を全くひとつのものとして実現せんとするわれわれの闘いと相通ずるものを見出せないであろう。

現地反対同盟の団結がかくあればこそ、われわれは、戦闘、援農、討論などの交通を通して、わが赤ヘル軍団の戦闘力と規律を鍛え上げることが可能であるし、事実なし遂げてもきたのである。

三里塚闘争のこうした性格を根本において規定するのは、それが日米帝国主義の反革命軍事戦略体系の再編の要めを解体する闘いとしてあることであり、かかるものとして、それは世界革命戦争の陣型を形成する闘い＝恒常的武装闘争の重要環たりうるからである。

同質の闘いは、「72年自衛隊二千人派兵」を前にした沖縄全軍労の解体・再編攻撃への反レ・パ闘争、後方支援体制としての交通・通信・運輸体系労働運動の解体再編攻撃に対する反レ・パ闘争、準反革命軍隊としての機動隊に管理された大学の新たな解体闘争、また、治安出動・スパイ・反ゲリラ戦訓練を軸に再編を開始した自衛隊の解体闘争などを挙げることができる。

これらはいずれも、米帝の60年代における柔軟反応戦略が敗北し日帝が米帝とともに大陸革命軍と対峙する時代に入っていることの証左である。それは、現存する革命戦争それ自体に日帝が直接介入するのではなく、米帝の反革命戦争の側方・後方をひきうけ、大陸革命軍の側方、後方を解体、再編しようとすること自体が、大陸革命戦争を世界革命戦争へ発展させる直接的契機をつくりださざるを得ないということなのである。

三里塚闘争の位置はかかる視点からのみ明らかにすることができる。東の三里塚、西の加太関空港を中心とした全国六ヵ所の新国際空港建設は、全国の米軍・自衛隊基地の移管・再編統合の要めとして、日米共同アジア反革命の大空輸作戦（大型ジャンボ機による）を想定して準備準備が進められている。のみならず、これは、「新全国総合開発計画」としてまとめられた全国的な都市構造の再編＝地域開発という形態を通した特殊現代的な合理化の重要環としてあり、大陸革命軍に対する帝国主義の軍事戦略体系の手直しが、資本の個別的生産過程、国民経済の枠組の上で行われる限り不可避の矛盾を生み落としている。三里塚をはじめ、前述した諸闘争が、世界革命戦争の陣型を形成する闘い、党と軍とその根拠地としての統一戦線の再編をつくりだす闘い、すなわち恒常的武装闘争として闘われてのみその展望を見出しうるのはこうした理由による。

七〇年代の中央権力闘争はかかる闘いを通して、その階級的基礎を恒常的に形成することができる。三里塚現地反対同盟の新しい胎動は、それを要求している。

2・11高校生は明治公園

高校生運動の革命的飛躍めざし

高校生の闘いが、反帝統一戦線の一翼を担い、政治闘争においても、学園闘争においても不抜の潮流を形成してきたことは周知の通りである。

かかる高校生の闘いが、今、一段の飛躍を要請されている中にあって、昨秋発足した高校生安保共闘会議を革命的に再編し、四―六月への飛躍を準備する闘いが社学同高校生委員会―高安闘委の手によって精力的に取り組まれている。

二月十一日は、一方における小西三曹闘争の第二波の推進とともに、高校生独自の部隊による「紀元節粉砕・卒業闘争勝利」をはじめ政治的スローガンを掲げた集会―デモンストレーションが準備されている。

全都の高校生は社学同―高安闘委の旗の下、この闘いに総結集せよ！

70年安保春闘にむけて＜上＞

諸党派の対応とわれわれ

共産主義者同盟中央労対部

今春闘に対し、諸党派は様々なスローガンでもって方針を提起している。中核派はバリケード春闘＝帝国主義を打倒する労働運動を提起し、ML派は労働者全共闘運動による春闘で資本大攻撃を主張している。さらにフロントも春季大攻勢をとなえ、帝国主義と対決する労働運動を主張している。これらの諸党派はいずれも春闘を安保春闘としてとらえている。

一方、革マル派及び青解は、反合闘争のための春闘であり、反合春闘になっている。これらは、安保闘争の強化をめざすよりは、むしろ労働運動の強化が基本路線になっているのである。

さてわれわれは、今春闘において、階級的労働運動を登場させることを提起している。われわれは闘う主体のないところの春闘の展望を語り、また闘いの爆発を期待するわけにはいかない。われわれは何よりもまず、自らの組織の戦術を提起してゆかねばならない。

このように問題をたてることによってはじめて今春闘を安保春闘として闘う立場を形成しうるのである。

だが、このような立場を貫ぬくためには、経済闘争と政治闘争、労働組合と反戦の位置づけに関して正しい理解をせまられる。われわれは諸党派の春闘方針を批判的に検討するなかで、これらの問題に対するわれわれの見解を明らかにしてゆきたい。

中核派の「帝国主義を打倒する労働運動」論

中核派は、街頭武装闘争の質を労働者が獲得することなしに、生産点での実力闘争はありえないという、それ自体正しい前提に立ちつつ、労働運動に対する正しい路線をうちえていないがために、「七〇年春闘は自信をもった反戦派が一斉に職場で決起するバリケード春闘」「戦闘的組合主義者と反戦派の統一戦線」を提起している。そしてこれは、「帝国主義を打倒する労働運動」（「前進」新年号）によって、理論的基礎を与えられている。

「帝国主義を打倒する労働運動」の第一の誤りはこの文句そのものにある。すなわち帝国主義を打倒しうるのは、全人民の政治的統一戦線を背景とした政治闘争（蜂起・内戦）であり、労働運動の延長によって帝国主義を打倒しえないことである。

第二の問題は、本来ありえない帝国主義を打倒する労働運動を提起することによって、逆に革命運動の内容が不明確になっていることである。すなわち労働運動が帝国主義を打倒（＝革命）してしまうのであるから、革命運動は党建設、革命意識の形成の問題に矮小化されてしまうのである。

第三にその結果、労働運動と革命運動との結合が、大衆的になされるのではなく、「労働者は自らの革命の主体として自覚し、自己の運動を労働運動一般ではなく、革命運動として把えねばならない」のように、個人の頭の中での結合になってしまうことである。

第四に、労働運動が帝国主義を打倒しうると規定することにより個々の労働運動が必要以上の革命的意義をもつものとして語られると共に、労働組合内の努力の蓄積と組合権力の奪取が、革命闘争の主要なテコとなるのである。

第五に、ソビエト運動論に関してはじめて言及したが、その内容たるや、われわれがすでに昨年春に明らかにした俗流ソビエト論に対する批判であり、あたかもわれわれのソビエト運動論も構改派の俗流ソビエト論であるかの如くとりあつかい、結局ソビエト論は切り捨てられている。

第六に、その原因は「大衆が立ち上らず、権力奪取が直接の日程にのぼらない長い前段階においては、革命運動を体現しているのは党である」との如く、革命運動が党活動に矮小化され、大衆の階級形成の問題に無自覚だからである。

第七に、だから自然成長性の強調、経済主義的政治が顔を出す。曰く、「革命党は現在の社会を前提にしてその中で必死に生活の防衛につとめる労働者の意志と運動とを最大限引き出しつつ、それを真の解放の道である革命に引き継がせねばならない。曰く「どんな改良主義思想によるものであっても、労働者の運動は権力を持った資本家階級との闘いである。……その闘いを帝国主義者に最も打撃を与え、支配階級を混乱させ支配の崩壊に一歩でも近づくようにもって行かせねばならない」

バリケード春闘とはこのような観点から提起されているのであり10・11月の街頭闘争、4・6月闘争とは無縁な方針であり、4・6月闘争を準備するための安保春闘にはなりえないのである。

ML派の「労働者全共闘運動」論

ML派の労働者全共闘運動論は一見ソビエト運動論に類似しつつもその内実は全くの経済主義であり、しかもそれのみにとどまらず実践活動とは縁のない空想を思いめぐらせている。

「学生戦線に生みだされた全共闘運動を労働戦線において実現し労働者全共闘運動の全面開花の時代として革命の七十年代を実現しなければならない。みずから権力を内包する統一戦線としての労働者全共闘の形成はブルジョア支配秩序を奪取し、二重権力を準備してゆく過程であり、プロレタリア権力を創出してゆく道である」

「日本資本主義の帝国主義確立の時期に照応して日本労働運動は一方において右旋回の道を歩み、他方において労働者全共闘運動への過渡的段階としての反戦青年委員会運動を経過してきた」（赤光八四号）

これらの提起は第一に労働運動の総括をふまえて労働者全共闘運動が提起されているのではなく、政治的統一戦線たる反戦を労働運動ととりちがえ、反戦の労働者全共闘運動への移行として提起されている点で決定的にあやまっている。

反戦は全人民的政治闘争機関へと発展させねばならず、ML派のいう労働者全共闘運動は、その一翼として位置づけられねばならないのである。

第二にこの反戦の位置づけの誤りによって、労働者全共闘論は、構改派の二重権力論と同じ内容になってしまっている。

第三に具体的方針の空想である。「労働者と学生の壁をとりはずし、党派グループ、個人の別を問わず革命派総体の力をもって、街頭と生産点の両方で春闘を発展させねばならない。

春闘をその工場の労働者の工場内の闘いに限定する必要はないし又、労働者だけの闘いに限定する必要も全くない。戦術は豊富にあり、革命派が隊伍を組んで工場におしかけ、職制や排外主義にこりかたまった反革命的労働者をなぐりとばしてバリケードを築き、事実上のストライキを実現してしまうのも悪いことではない。

第三にこうした春闘の激発のなかで、労働者の階級的結集化をひきおこし工場の内外に労働者全共闘運動への条件を能動的につくりあげていくのである。」

これは全く愉快な方針だ。たとえ一個所でもよいからML派の全力量をあげて実現してほしいものである。

問題は春闘における労働運動の戦闘性が、そのままでは階級性に転化しえないことにあるのであり、労働運動に階級性を回復するものとして反戦等の統一戦線があることを完全に見落している。

反戦を中軸とした種々の共闘組織でもって春闘を闘い、そのことを通じて反戦を強化することをめざさねばならないのである。

ML派はせっかく、党＝ML、軍＝紅旗戦線、統一戦線を提起しているのであるが、統一戦線を労働者全共闘運動とし把握するならば、それは全く矮小な革命論に転落してしまうのである。すなわち、すでにみてきたように、労働者全共闘運動の内実とは、経済闘争の闘争組織であり、経済闘争を政治的に位置づけようとする試みに他ならないからである。労働者全共闘運動なる方針は、中核派の「反戦派労働運動」以下的存在なのである。

青解の「行動委と反戦との結合」論

社青同解放派は最近、行動委員会と反戦との結合を提起しはじめた。われわれが以前提起していた反戦と労研の関係とほぼ同様なものとしてであり、しかもわれわれとちがって「反合闘争の発展としての政治闘争」を夢みる故に当然にも、産別反戦ー産別行動委員会としてしか組織しえず、結局は彼らのあるがままの組織体制を美化するものとして提起されていることをみぬいておかねばならない。

彼らの内容は「反合闘争の発展としての安保闘争」「自分たちが企てていることが帝国主義支配の社会的単位としての工場制度そのものの粉砕＝否定」「労働者階級としての運命を見つめた共同の中に徹底して生きる人間の新たな結合」「労働組合的共同から徹底的に区別されたプロレタリア統一戦線の既成部分としての行動委員会運動」等々。

第一にこの間の街頭闘争において反戦派労働者の先頭に立って闘って来たのは、他ならぬ地区反戦に結集する労働者であり、産別反戦のそれは第二戦線を形成していたことが明らかにされねばならない。そして組合的共同（団結のこと？）をのりこえることは他ならぬこの地区反戦の質を職場に形成してゆくことである。

この単純な事実にひたすら目をそむけようとするのは、他ならぬ彼らが自らの現実のありのままの姿を合理化しようとしていることに他ならず、そのことは第二に、彼らのいう「プロレタリア統一戦線」論でのものを誤らせている。

彼らは以前には社会的権力を提起し、反合闘争の革命的意義を位置づけようとしたのであるが、最近においては「工場の破壊」を提起している。すなわち帝国主義的再編の進行の結果、今日の工場は労働監獄として非常に悲惨な状態を生みだしつつも同時にその工場でのものの革命的、ハカイ的側面が形成されつつあるとするのである。しかも彼らが「資本制生産様式を桎梏と感じる力と熱情の動きを展開したものがプロレタリアートの団結であり、階級闘争である」と言うとき、プロレタリアートの階級性はたかだか即物的な反抗におしとどめられ、プロレタリア統一戦線なるものも、権力闘争とは全く関係のない、それゆえいくら口先で労働組合的共同の解体を提起しても、労働組合的共同からぬけ出ることが出来ない構造になっていることが明らかにされねばならない。たしかに青解の場合、MLとちがって民同労働運動の一定の総括の上にたって民同の階級形成してゆく視点をもっているが、労働組合的団結を階級的団結へと階級形成、階級的団結を、ブルジョアジーとの政治闘争の観点から位置づけられないために、階級的団結の形態を提起しえていないのである。

何故なら、政治的統一戦線がプロレタリアートの階級的団結の形態でなければならず、したがっていかなる内実の政治的統一戦線を形成するかを明らかにしなければならない。「プロレタリア統一戦線」がこの政治の質を何ら表現しえず、それゆえ彼らの提起するソビエト運動論も、労働組合的団結から階級的団結への再編という階級形成への視点にとどまり、政治内容が不分明なるが故に、階級的団結を形成することが出来ないのである。このことが明確でないが故に、青解はたえず反帝統一戦線と労働組合的統一戦線の間を動揺しているのである。

われわれの基本的立場

以上の批判的検討のなかで次のことが確認されるであろう。われわれが提起してきた反帝統一戦線と階級的労働運動とはまず第一に帝国主義打倒が政治的統一戦線を背景にしたによってのみ可能であることを明らかにした。第二に、民同型労働運動と、日本型反政治闘争の総括のなかから組合主義的統一戦線に代わる新たな型と質をもった統一戦線として反戦が登場したことを明らかにした。第三にこの新たな型の政治的統一戦線が発生したことによって、労働運動が従来の組合主義的労働運動（それは必然的に組合主義的統一戦線と一体となっていた）から労働者の階級的団結を大衆的に形成してゆくものへとその質をかえる可能性が生れたことを解明した。

第四に、この反帝統一戦線と結合された新しい質の労働を、われわれは階級的労働運動としてその内実を規定してきたのであった。

すでに明らかにしたごとく階級形成が単に意識の問題や党の形成にとどまらず、いかなる質の政治的統一戦線を形成するかということであることはどのような理由にもとづくのか、それは労働組合的団結、賃金制度を前提にし、その上での労働条件の防衛をめざすものであるのに対し、階級的団結とは賃金制度撤廃のための政治革命をめざすものであることによる。

だから組合的団結の形態は労働組合であり階級的団結の形態は政治的統一戦線乃至、政治闘争機関なのである。この階級形成と階級的団結の形態が政治的統一戦線の問題として、そして具体的には政治闘争の問題として語られねばならないこと、このことを諸党派は全然理解していないのである。

このように問題を立てるとき、労働組合運動の性格をはっきり規定することが出来る。すなわち、労働組合機関それ自体は、組合的団結の形態であり、政治的統一戦線の機関たりえないことを確認しなければならない。しかしながら組合運動は種々の階級的団結をめざした組織（労研・反戦・党細胞等）によって荷われるのであり、したがって組合運動のなかでこの階級的団結を強化することが出来るし、また目ざされねばならないのである。

それゆえ、労働組合運動それ自体に対するわれわれの方針はきわめて具体的にしか問題になりえない。それはわれわれの勢力が組合機関のどこを占めているか、さらには階級的団結に向けての組織がどの程度進められているか、さらにはこの場自体が持つ戦略的位置等から導かれるであろう。

最後にわれわれは反レパ闘争の階級的意義を明確にしておかねばならない。諸党派はこの反レパ闘争の意義について全く無自覚であり、したがって有効な方針を提起しえておらず、反戦にとって極めて大きなマイナスをもたらしている。反レパ闘争とは組合運動ではなく、政治的統一戦線（反戦）と労働運動を結合する具体的な契機となるものであり、階級的労働運動として発展させねばならないものである。われわれは反戦派労働者の中心的課題が春闘という組合運動にあるのではなく、反レパという階級的運動にあることを明らかにしつつ、その上にたって四・六月闘争における反戦派労働者の政治的任務を明らかにしなければならないのである。（続く）

社学同の組織総括と飛躍の課題（1）

10・8以降を担った「国際主義と暴力」を七〇年代へ向け飛躍せしめよ！

■共産主義者同盟中央学生組織委員会■

67年秋「国際主義と組織された暴力」の登場…▲

この三年間の我々の組織活動の蓄積、なかんずく六九年十、十一月闘争の試練の中で、我々はようやく、党建設における計画性、目的意識性の中心問題に接近している。最終的には新らたな共青の規約が軍事を組織することを軸にして定められるところまでにつきるのだけれども、現在はそのような組織建設への過程であり、正規軍ー反帝戦線の建設をカナメにして地区党の強化、社学同、共青の強化の同質化がはかられなければならない。党建設は真空の中で行われることはない。正規軍ー反帝戦線の建設をカナメにした党の革命は世界ー日本の階級闘争及び党派闘争の現段階だからこそ課題に上っている。今日にいたるこの三年間の社学同の組織総括は我々がどのような組織的実践の中で経てきて現在の飛躍をせまられているのかとして行われなくてはならない。

以上から、この三年間の社学同の組織総括を行おうとするとき、問題の中心軸にすえなくてはならないのは、一〇・八羽田闘争をもって開始され、エンプラ闘争をもって定着したゲバ棒闘争の革命論的解明とゲバ棒闘争を一貫して担ってきた社学同の党組織論的位置付けをめぐる論争である。

なぜなら、10・8ー11・12羽田闘争の後、「国際主義で武装された組織された暴力」として表現された社学同は、全国政治新聞と議長を軸にした、いわゆるレーニン型の党組織の枠の中ではストレートに位置付けることは出来ない性格をもっていたのであり（日韓闘争の段階では「反帝戦略部隊」等々）この社学同を指導しうる党組織の質をめぐって、同盟6回大会以降の旧マル戦派との党内闘争、旧マル戦派の逃走から7回大会、及び以降の論争の一つの中心が存在したからである。

すなわち、同盟7回大会によって我々は「現代における革命党とは何か」「現代革命とは何か」という課題に、画期的に接近し、かつてブント統一委員会も危機く備えていた「下からの党建設論」を克服する第一歩を踏み出したのである。同盟7回大会に至る過程では旧マル戦派は、このような党的任務に答えることのできない自然成長的党建設論を、逆手論から、いわゆる「夜、昼論」に至るまで自ら露呈したのであり、公然的危機論、突破口論、トロツキー永久革命論などとの破産を示したのである。

同盟七回大会は、このような経済主義者マル戦派との党内闘争を経て、世界同時革命を帝国主義の侵略、反革命に抗し、国際的階級危機を世界革命へ」の下、三ブロック階級闘争の結合を提起し、中央集権ー地区党を党の型として定めた。七回大会は帝国主義の侵略反革命を粉砕する政治闘争及びこの政治闘争へと帝国主義的統合機構への全社会的再編粉砕闘争を高めることを革命の契機とし、この国際的闘いの一環としての自民党政府打倒を目指す実力闘争部隊として、三派全学連、地区反戦の反帝統一戦線を位置付け、社学同及び全国青年同盟（仮称）をこの反帝統一戦線の組織者であるとした。軍事委員会は七回大会において発足したが、党組織上の位置は不明確。このことはゲバ棒闘争の両義的段階に規定されている。社学同もこの段階では三派全学連フラク化する傾向をはらみ、党形成と階級形成のこの段階での到達点に規定されてその組織的性格の未分化を残したまま「国際主義と組織された暴力」という位置付けの中で組織的に拡大した。

だが、68年3・10〜31三里塚闘争、4・1王子闘争をもっての権力の立ち直り、国際的には、5・1ジョンソン声明をもっての米帝の世界戦略の転換傾向が我々に新たな試練を課した。

4・28沖縄闘争、6・21〜6・28〜7・27ASPAC闘争は、この試練を荷うものとして、共産同ー社学同の独自の闘いとして闘い抜かれた。ここで問われたのは日帝総路線対決闘争＝中央権力闘争の革命論的意味、及び街頭バリケードの革命論的意味であり、これらの闘争を共産同①社学同の独自の闘いとして闘い抜いた意味。

68年春、「国際反革命ー自国帝国主義打倒」戦略確立へ…▲

さらに、ASPAC闘争における日帝打倒主義的傾向の発生は、安保闘争との関連において、国際反革命同盟粉砕闘争と自国帝国主義打倒闘争とを結合させて闘い抜く戦略の確立を問うた。

反帝全学連の三分解とゲバルトは、(イ)三派全学連がポツダム自治会を基盤にして形成されながらもかつての8中委9大会路線などとは異質の組織であり、各党派の学生同盟にケン引された戦略部隊の政治展望と実力闘争によって自治会左派＝急進民主々義の大衆を収約していた闘争機関であったこと(ロ)すなわち三派全学連は総体としては旧来の急進市民主義最左派としての闘いを引き継ぎながらも、階級闘争が権力闘争へとさらに一歩接近する中では大衆の新たな階級的団結形態へと止揚されるべき組織であった。(ハ)我々の明大闘争での敗北以降の中核派による全学連の私物化に対抗して反帝全学連は結成されようとしたが、10・8以降、ASPAC闘争に至って、各党派の戦略的対立が煮つまり、三派全学連がポツダム自治会を止揚する方向として 内包 していた「各党派の学生同盟にケン引された戦略部隊を軸に、闘争ごとに結成される闘争委員会が大衆闘争を組織する傾向」が強まり、各党派の戦略部隊の軍団化の日常傾向が強まったことなどによって解体せざるをえなかったのである。

我々の主体的総括は、むしろ三派ー反帝全学連の解体の根拠を組織論的に解明し、我々の党的任務を設定することができず、ポツダム自治会を 基盤にした 統一戦線に、我々の戦略を接ぎ木しようとした、革命主体としての未熟さの克服に求められなくてはならないのである。

そして、この党的課題は先に述べた革命論、戦略論の発展の問題でもあったし、社学同に とっては、その「国際主義と組織された暴力」と抽象的に表現された、党と反帝統一戦線との関わりの中における組織的位置の具体的解明にもとづく主体的飛躍が問われていたのである。

8・3論文は労働者国家根拠超論にもとづく過渡期世界論、「帝国主義の侵略と反革命の不統一」に対する攻撃型階級闘争としての階級闘争の 質」に「見合ったもの」として、世界党ー世界赤軍ープロレタリア統一戦線の建設にむけた党ー赤軍ープロレタリア統一戦線の建設を提起し、三ブロック階級闘争の結合を世界革命戦争として解明しようとした。

68年秋、日米帝国主義軍事体系への肉迫、プロ独派への自己形成の端緒を獲得…▲

これは過渡期世界論という視角を提起し、かつ、10・8以降の階級闘争の性格を対象化することに接近したという点で画期的だったけれども、かつての政治過程論、第三期論などと同様、革命主体の実践でのものがたんに「階級闘争の質」の中に還元され、そこからもう一度、革命主体の質が問題にされているといった発想において政治的な欠陥を伴って提起され、世界党建設のための国際的党派闘争（特にスターリン主義、人民戦線派に対する）その他の党的任務の基軸があいまいにされたまま、帝国主義の自動崩壊的危機（プロ独かファシズムか）を展望する傾向を生んだ。

ここでは「国際主義と組織された暴力」として位置付けられた社学同が、いかなるブントの党的飛躍を要求し、社学同自らも飛躍を要求されているのかが明らかにされないまま、あるがままの社学同＝世界赤軍論として主張されるような党建設における自然成長性を根拠づけることになったのである。

同様に理論戦線7号坂論文では(イ)「世界党ー世界赤軍ー世界統一戦線」が国際プロの登場を可能とする「運動＝組織形態」としてしか提起されず、(ロ)「労働者国家↔国際プロの結合↔国際反革命同盟」と帝国主義の不均等発展との矛盾＝侵略と反革命の不統一を統一するものとしての、帝国主義の侵略、反革命戦争とファシズムへの推転を想定し、(ハ)この来るべき危機の中での「社会党、民社党の解体の必然性」から「社会党との統一戦線、党派闘争、解体」を追求し、その実現のために革命的左翼の統一戦線＝日本共産主義者党協議会を追求し、その下での全学連の統一と全国地区反戦連合を提起するという構造であった。そしてこの統一戦線がソビエトへ転化するとされる。

(ニ)以上のような「統一戦線の最高の形態としてソヴェト」がファシズムとの間に二重権力情況を形成し、世界党ー世界統一戦線ー世界赤軍の中に労働者国家プロを引き入れ、共産党の解体も結果」とされる。(ホ)その他革命的反戦闘争と経済闘争の結合による社民ゼネストのマッセンストへの転化論。中核派の社民との革命的統一戦線論との差が戦略的方向の差のみになっていること。（このような戦略自身が問題なのだが）

この論文は反帝全学連の三分解を総括しようとし、総括のカナメを「戦略と統一戦線術」に求めたのだけれども、「次は何か」におけるトロツキー統一戦線論のあてはめ的展開によって党形成ー階級形成における目的意識性の独自の領域が捨象され組織的総括が明らかにされないままに、10・21闘争への政治展望を提出するのみにとどまったのである。

だから直接的には三派全学連の解体、反帝全学連の三分解としてあらわれた社学同の危機は、その後飛躍をもって解決されることのないままに、8・3国際反戦集会の一定の成功の上に立って、10・21〜11・7〜11・22闘争に入っていったのである。社学同の飛躍の課題は共産同の飛躍の課題でもあり、この時点での社学同の組織的限界は同盟総体の限界であった。

このことは同盟7回大会に至るマル戦派との党内闘争において、マル戦派がトロツキー永続革命論に依拠したのに対して、我々が「何をなすべきか」以来のレーニン組織論、革命論をふまえ、目的意識的党建設ー階級形成、共産主義的政治の独自性を主張してきたことを継承しつつ、レーニン組織論でのままの枠では解決することのできない、社学同＝「国際主義と組織された暴力」の党組織論的意味を明らかにすることを命題としていたのである。

10・21闘争の勝利〜11・7闘争の敗北〜11・22東大闘争での同盟の動揺は、以上の過程で蓄積されてきた同盟の到達点と限界とを一挙に明らかにした。

10・21闘争の勝利は10・8闘争以降の階級闘争が一つの頂点にさしかかったことを示すものであった。

防衛庁ー新宿ー国会新宿、主に日米帝国主義軍事体系に対する徹底した実力闘争として闘かわれたこの闘いは、安保粉砕闘争をカンパニア闘争の段階から権力闘争へと接近する方向を勝ち取った点で決定的であった。

国家権力による騒乱罪適用は、帝国主義者がこの闘いを持って、革命的左翼に対する徹底的な弾圧に踏み切ったことを示した。

また社共人民戦線派の対応も、この闘いをもって、革命的左翼との決定的な対立を深化させたのである。

即ち10・8闘争はIMF、GATT＝NATO、安保の国際反革命同盟下での日帝の階級支配体制であった戦後議会制民主々義の支配構造を根底的にゆるがしたのであり、ブルジョアジーは従来通り社共人民戦線派を中心に置いた治安対策の決定的破綻の徴候に対して、「権力弾圧」を行なわざるを得なかったのだけれども、革命的左翼は、いわゆる戦後民主々義として形成されていた階級間の力関係を利用しながら「国際主義と組織された暴力」をもって、この力関係を左からつき動かすことによって10・21闘争に至って急進民主々義最左派からプロ独派へと自己を形成する端緒をつかんだのである。

10・21闘争のこのような大きな階級的意味に対する権力、社共の対応の変化に対して、11・7闘争は10・21闘争の切り開いた地平を守り踏み固めるべき闘いとしてあったのであり、そのことは我々と中核派を中心とした革命的左翼の統一戦線としても表現された。

しかし社学同はこの闘いを首相官邸占拠から政府危機→政治危機の形成として提起し、この位置付けからしては、11・7闘争が基本的に敗北したことによって、社学同の組織的未熟さを早急に解決することを迫られたのである。

（このことは総括として、理論戦線8号坂論文、與田論文で行なわれているが坂論文におけるトロツキー永続革命論への依拠と比較したとき與田論文における永続革命論の把握＝プロレタリアートの独自性を組織することーは正しい視点を提起している）

権力とその手先への暴力を支持

全人民の武装へ更に組織化を

【大阪支局】日帝の世界戦略＝アジア軍事戦略に、帝国主義軍隊の創出と強化を70年を一つのメルクマールとして急ピッチで具体化されつつある。

この帝国主義戦略に手助けする非武装中立、自衛武装論は65年日韓以後、日本型社民の中から抬頭している。総じて帝国主義労働運動が政治を抜きにした賃闘、改良論をもって積極的に、通信、運輸の軍事化に加担してきた。だから一般的な合理化阻止や政治闘争の接木で あってはならず、また「反戦派労働運動」といわれる合法の領域で逆手、戦闘化を自的化することは反戦派労働者を見殺しにするものである。

ここから導き出される我々の小結論は、反レ・パ「春闘」を叛乱、守る会や工場、職場支配体系ー職務給、報償金等の粉砕をなおざりにした賃闘論を拒否するということである。大衆的デモストレーション、カンパニアに呼応する軍事行動、さらにこれに応えるより大規模のカンパニアである。世界革命恒常的武装闘争の一環として戦略的闘争を目的意識的に展開すべき時がきている。「革命の軍隊」に結集し破壊活動を強化、ブルジョアジーを戦慄せしめ帝国主義政策の推進、着加担者、手先どもを絶滅することが大衆を結集し、大衆武装を促進するのである。

69年「安保決戦敗北」は我々に多くの 教訓を 与えた。その一つが、先きの位置ずけによって全国化しようとする徴候である三里塚闘争であり鉄道建設輸送阻止闘争であった。反レ・パ「春闘」はすでにはじまっており70年代権力闘争に突入しているかに見える。かかる中で一月二十八日付朝日新聞（夕刊）の報道によれば「二十八日午前三時半ごろ「大阪市北区堂島西町、大阪市外電話局北館の玄関で爆発音がして、高さ三㍍余りの炎があがっている」「また同三時五十分ごろ、豊中市三和町、全電通労組大阪市外支部書記長豊田稔さん（[illegible]）宅裏のガレージ付近で『ガチャン』という音がした」「また午前九時ごろ、寝屋川市本町、寝屋川電報電話局の裏庭に置いてあったトラックの荷台に油が流れ、付近に乾電池、ゼンマイ、段ボール、毛布の切れはし」

また、大阪日日新聞一月二十日付によれば、見出し「〃新型爆弾〃投げ込む』？電話局や組合幹部宅へ」そして「犯人の人数などはわからないが電話局の壁に「暴力革命万歳」「ロメ軍団」のビラ」「また豊田さん方玄関にも『権力と一体となり、自分の地位と利益のみを守ろうとしているキミに対し、プロレタリアートより警告する』とのビラが張られている」「組合執行部に批判的な一部反戦グループのしわざではないかと捜査をはじめた」と報道している。

これは70年代戦略を貫徹せんとするブルジョアジーの「春闘」前段政治処分、弾圧に対する鋭い反撃が開始されたことを意味している。われわれは、このような革命的プロレタリアートの戦闘的闘争を断固として支持するものである。

事後逮捕ー別件逮捕うちつづく

革命的警戒心を固め、救対活動の強化を

日本階級闘争において革命的激動の世界革命戦争・内戦への端緒を切開いた去る10・11月闘争に対して、敵権力の凶暴かつ大規模な弾圧が展開されたことは周知の事実である。

しかし、それは過去の事態でなく現在においても、国家的政治警察の全力あげた捜査・摘発体制をやって続けられていることに注目しなければならない。すでに昨年来ー今年にかけて十余名の反戦労働者・学生が事後逮捕され、威圧的な言辞の手にかかって穿通的な調書供述を強要されている。

10・11月闘争が敵権力との対抗関係を部分的に突破した戦術としてあらわれたことによって、それを闘いぬいた英雄的戦士に対しての政治警察の対応は全く報復主義的であり、取調べにあたっても暴力行為的脅迫は常識化し、戦士にたいする精神的打撃を極度におしつめることが自己目的化されている。被疑事実によって起訴は辛うじてしたものの、物的証拠不十分とみるや、別件による取調べ延々と二ヶ月余にわたり所轄警察に身柄拘留のまま続け、自白強要によって若干でも成果があるや、たちまち重要人物に仕立てさらに長期拘置ー実刑をねらう。そのために一日十数時間の取調べの強要、接見人にたいする（取調中との理由をもった）事実上の接見禁止、政治的機関紙はおろか娯楽的読み物も「心を乱す」（！？）といった理由で差し入れ禁止、ないし房内へおろさない、等々あげればきりのない不当弾圧で圧迫するのである。

現行騒擾法等法規無視のこの事後逮捕者、別件取調者に対する政治警察の弾圧はたんに恣意的なものでない。10・11月闘争は戒厳体制で臨んだものの、それは日帝政治委員会の政治的勝利を実現しえなかった。その政治的勝利はわが同盟はじめ革命的左翼への破防法弾圧が現実化しなければ現実の夢ともならない。日本政治警察は4・28破防法弾圧のザル網的捜査と側面的適用をいたく「反省」し、立証過程に必死となっているのである。事後逮捕ー別件逮捕・取調の意図はわずかにその一部を果てうというものにほかならない。

敵権力・政治警察のかかる意図もしかしわれわれの強固な組織体制と意志一致のもとにますます実現困難なものとならざるをえないであろう。だが、われわれはただ右のことによってだけ敵権力に対する警戒心をゆがめてはならない。われわれの戦士を不可避的であれ敵の手に渡すこと自体を最少限にくいとめるための警戒心、あらゆる手段を組織・個人的にとることそのためのあらゆる措置は当然、いささかの異状も留意し、機敏な対応をとることを全読者にたいしてよびかけるものである。けっしてそれは日々の活動全体に臆病になる結果をもたらすものではなくて、真に大胆と細心の警戒の結合した同僚性ある活動の組織性ー訓練として獲得されるべきものである。

革命の軍隊・党の革命
共産同パンフ
──10・11月闘争の運動・組織論的総括のために──

〈序章〉
1 安保決戦で切り拓く階級闘争の質
2 安保決戦をめぐる階級情勢
3 安保決戦と党の革命
4 10・21闘争総括
5 十一月闘争と同盟の任務
6 当面する「軍事」の政治的質
7 七〇年代を担いきる革命党
8 十一月闘争とわれわれの軍事戦略
〈おわりに〉
ー十一月闘争の総括にかえてー

主内容
■九回大会の意義と限界■第二回国際反帝会議総括■階級的労働運動論の整理■山代論文の評価（全共闘運動の現段階について）■革命戦争論■ソビエト運動論の整理■パルチザン、赤軍派、中核派の批判

B5版　64頁
二五〇円（〒五〇円）

社会主義学生同盟
全国委員会機関誌
理論戦線
300円（〒70円）
8号　残部僅少

共産主義者同盟理論誌
共産主義
13号　残部僅少